特集を終えるにあたって

この KONC 会報の特別号は，「CITES '92京都会議は何を残したか」と題して行われたシンポジウムの記録である。CITES '92京都会議は，1992年３月２日から13日にかけて，京都宝が池国際会議場で行われた。この会議は６月の地球環境ブラジル会議とともに，ここ数年の「地球環境」ブームのなかのひとつのピークであり，1992年の環境をめぐる大きなイベントであった。そしてこの会議は，日本においても，NGO が認知されたとまでは言えないまでも，少なくともマスコミや一般社会の中で，NGO という言葉を公認のものとした初めての機会といってよいだろう。

もっとも本文中にもあるように，日本の NGO の CITES '92京都会議への参加は，歓迎されたものではなかった。登録申込前後のごたごたは，日本政府が NGO の参加を避けようとしていることを思い知らされるものであった。しかしそのことは NGO 側の立場から言えば，日本の NGO の力量を反映したものといえる面があったのだろうとも思われる。

また経過や会議の様子を見て感じたことは，基本的な情報が伝えられていないということであった。何事かを考えようにも，判断をするための情報がすべて伝えられているわけではなく，大きな課題であった熱帯林やクジラにしても，対立した両者の意見を聞いても判断ができない場合すらある。環境倫理と環境論理とそして経済と，これらが交互に交錯し，情報が飛び交う中で，判断をするための情報を流すことは，主催者の義務であろうし，それがなされないのであれば，圧力団体たる NGO の役割であったのだろう。

その意味では，CITES '92京都会議やブラジル会議での各国の NGO の活躍を見るにつけ，本来ならば日本の NGO としての一定の力量を持っているはずである KONC に何ができるのか，あるいは何が期待されているのかを考えなければならないと痛感した。

この会議は，日本の野生動物の保護について考え行動をしてきたものに取って，いくつかの問題を残した。その問題点を整理しておくことは，今後の運動を進める上で非常に重要なことと考える。また会議の本題とは別に，日本の NGO としては初めてといってもいいかもしれない国際的な会議の場での活動を行い，NGO の意義と役割については，大きな課題があることも明らかになった。それらの課題を整理し，NGO としてのまとめをおこなうために，冒頭に掲げたシンポジウムが，開催された。

会議からすでに数カ月が経過し，その後の議論も各地，各団体で行われており，いささか時期外れの感もあるが，会議の成果とは別に，会議直後の NGO の考え方を記録しておくことは大きな意義があると考える。その意味ではこれまでの KONC の会報とはいささか趣が異なり，いそいで書いていただいたため，原稿の形式などは著者の自由におまかせした部分がある。原稿を書いていただいてからさらに日がすぎてしまい，著者の方々にはご迷惑をおかけしたが，この点は事務局の責任である。

関西自然保護機構事務局
布谷　知夫